

2024年4月21日 No. 3716

先週の講壇から

「わたしの弱さに立つ」

コリントの信徒への手紙Ⅱ 第11章23節～33節

聖句「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか。」(11:29)

1. 《上昇志向》 外野の人から「キリスト教はインテリの宗教」「教会は金持ちの集まり」等と揶揄されますが、実際には、色々な境遇の人たちが居られます。どうしてイメージと現実のギャップは生じたのでしょうか。明治大正期、教会創設に私財を投げ打って尽力をされた方たちの存在、戦後の米国人宣教師による来日、キリスト教ブーム（英語ブーム）等のイメージでしょう。上昇志向です。しかし、憧れだけでは信仰生活は長続きしません。
  2. 《自信喪失》 現代の教会を取り巻く状況には、むしろ希望が感じられます。私たちの教会には、火縄銃も英語もないからです。教会には、もはや礼拝しか残っていないのです。私たちの依って立つべき所が明白です。パウロは「異邦人伝道」で大成功を収めた人として語られますが、事柄は単純ではありません。例えば、アテネではアレオパゴス（評議所）での講演会を開催して貰うのですが、話が「キリスト復活」に及ぶや否や、聴衆の失笑を買うのです。「お祝いの打ち上げ花火」的な表現の多い「使徒言行録」でも、アテネ伝道の失敗だけは正直に綴られています。そんなスランプ状態のパウロの語る福音を、しかし、コリントの人たちは信じたのです。人間の知恵や力が尽き果てた時、神さまの御力が働いたのです。
  3. 《燃える心》 11章には、パウロが伝道旅行の過程で経験した、ありとあらゆる困難が羅列されています。要するにパウロの愚痴です。自分の苦労話を並べ立てるのは格好良くはありません。こんな話に憧れを感じる人は誰もいないでしょう。却って、教会から去って行くでしょう。でも、キリストの十字架だけを見詰めていたパウロは、苦労して難儀して、自らの弱さに直面する度に、十字架を実感できたのです。弱っている人のことを聞けば、自分も弱るし、躓いた人のことを聞けば、心配で困ってしまうのです。「心を燃やす」とは、理想に燃え立つとか情熱に胸膨らませるとかではなく、不安で苦しい思いになって「心を悩ます」ことです。トントン拍子に人生が上手く行っている時には「成長」のチャンスはありません。図体がデカく成っているだけ。私たちは悩んで成長するのです。
- 朝

日研一朗牧師